クリストファー

b-svaha

僕はあるとき、地球という星に、男の子として生まれたことがあった。

僕の目はライトグレーで、髪の毛はブルーネットだった。

大人になった僕は、背が高く強い筋肉が立派な骨格を覆う体になっていた。当時、地球では、僕のような容姿の男は「ハンサム」といわれ、人々の間で人気があった。

自分ではない誰かを演じるということに心惹かれた僕は、俳優になった。少しずつテレビや映画に出るようになった僕に、あるとき、ひとつの映画で主役をする話が舞い込んだ。

その映画で、僕は、宇宙から来た子供が地球の両親によって育てられ、やがて地球の人々をさまざまな危機から救済するという、スーパー・ヒーローを演じた。

映画の中で、僕は空を飛び、列車も止めるような超人力を発揮し、人々を悪から守った。僕にできないことは何もなく、僕は誰からも愛された。

この役柄は、　何から何まで僕にぴったりだった。実際、僕はこの映画を作るために生まれてきたのだから、当然の話といえばそうなのだが…。

人々は、この映画を愛し、シリーズが四つ作られた。

またあるとき、僕は、時を越えて一人の人を愛するという映画にも主演した。

この映画も、僕がどうしても演じなければならない映画だった。その中で僕は、肉体の次元を越えて愛を貫くという生き方があることを人々に示した。

低予算、不評なスタートだったにもかかわらず、この映画は、次第に、世界中にファンを生み出していった。

その後僕は、いよいよ本当の役柄を演じることになった。そのときは、まったく突然に訪れた。

今度は、どの映画会社から話が来たのでもなく、どの本から脚本が書かれたのでもなく、実際、脚本自体が存在しなかった。

乗馬の競技をしていた僕は、馬から落ちて首の骨を折った。それが、Take One の始まりだった。

そのときから僕は、首から下がまったく動かせなくなり、それは呼吸する能力さえも奪い去った。これが、僕が人生で演じるもっとも困難な主演映画なのだと気づくには、しばらくのときが必要だった。

この事故に遭うまでの僕は、映画の成功もあって、文字通り、”スーパーマン”のような行動力をもって人生を切り開いていた。

僕は大統領にも会えたし、自家用飛行機も操縦し、乗馬もたくさん持っていた。僕自身、自分にできないことは何もないのではないかと感じていたくらいだ。僕は、いつも、力と自信に満ち溢れ、誰からも愛されていた。

ところが、落馬した後の僕は、まるで別人のようになってしまった。一人では手足の指も動かせず、背中も掻けず、寝返りすらも打てなくなってしまった。呼吸器がなければ、息を吸うことも、話すこともできなくなっていたのだ。

僕の成功を知るがゆえに、人々は余計に僕を哀れんだ。世界一強かった男が、植物人間になってしまうなんてと、この世の冷酷さを嘆く声も聞こえてきた。

けれども僕は、決して諦めてはいなかった。必ず、また元のように、自由に歩き回れる体になることを心に誓い、毎日４時間のリハビリを懸命に続けた。

「僕は、スーパーマンだった男だ...。

こんなことで負けるはずがない...。

負けるわけにはいかない！

必ず、この不自由な体を直してみせる！！」

僕は、実際には何の反応も示してくれない五体に懸命にそう言い聞かせ、歯を食いしばってリハビリを続けた。家族やドクターたちも、そんな僕を心から支え、ともに歩んでくれた。

僕は、妻と共に、僕のような脊髄損傷による障害を持つ人たちを支援するための麻痺財団を立ち上げ、政界と医学会に、治療手段としてのES細胞の研究と予算の拡充を求めて、ロビイストとしても活動した。

僕は、数年の後に右手の指が動くようになり、車椅子を操作できるようになった。しかし、そのほかの機能が回復することはなく、再び自分の足で歩いてみせるという、ゴール・テープを切ることはできなかった。

僕は、事故後約１０年で、心臓発作によりこの世を去った。

今思えば、僕のあの人生のテーマは、肉体人間としての限界を超越することだったことがわかる。

「スーパーマン」、「ある日どこかで」、そして『落馬後の僕の人生』という三つの映画を貫いていたテーマがそれだったのだ。

二つの映画の中では、僕は限界を超えることができたが、三つ目の「映画」においては、僕はそれに失敗したと思われていることはわかっている。たった十年のうちに、僕の髪の毛はほとんど抜け落ち、肉体は無残な姿に変わり果ててしまったのだから…。

突然、天国から地獄に落とされた絶望感や、夜中に呼吸ができなくなったときの恐怖や、無性に痒い額すら掻けないときのどうしようもないストレスなど、無論、人とシェアしたいなどとは思わなかった。

しかし僕は、限られた能力と環境の中で、自分にできることをすべて全うしたつもりだ。僕の亡き後も、かの財団は、ES細胞による治療体制の確立に向け活動を続けている。あと数年もすれば、損傷した肉体機能を再創造することも、夢ではなくなるだろう。

僕の体は死んだが、僕の意思は、財団や科学者や医師らに引き継がれ、新しい治療手段となって、肉体麻痺に苦しむ多くの人々が肉体の限界を超越することを可能にするだろう。

僕の、三つ目の映画の出来具合は、そのとき明らかになるはずだ。

クリストファー R.　に捧ぐ